



Title	イギリスの社会と言葉(1)-語彙を中心に-
Author(s)	丸山, 孝男
Citation	明治大学教養論集, 206: 99-113
URL	http://hdl.handle.net/10291/12205
Rights	
Issue Date	1988-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

イギリスの社会と言葉 (1)

— 語彙を中心に —

丸 山 孝 男

1. はじめに

ごく普通の語彙だけを扱っている「英和辞典」ならいざ知らず「新語」、「最新情報」あるいは「時事」と名の付く最も up-to-date な情報提供を主体とする英和辞典づくりに参加してつくづく感ずることは、何年もかけて辞典ができあがったあかつきには、その辞典はすでに最新情報を提供する辞典の機能を失いつつあるということである。自分で辞典づくりに参加していながらこういう言い方をしてしまっは身も蓋もないのだが、苦勞して年月をかけて「情報辞典」なるものがようやくできあがった頃には、すでに続々と新語が誕生しているのである。とくに時代の流れが急テンポの時代に於てはそうである。

新語とはいわば社会の新しい一側面を映し出す鏡でもある。まさに次から次と生まれくる新語の誕生と「新語」あるいは「情報」と名の付く辞典は常にいたちごっこを繰り返しているわけだ。いや、いたちごっこという表現は適切ではない。新しい情報なるものに対して「辞典」は常に後手にまわらざるを得ない。むろん、辞典に収録されぬままに消えていく言葉もある。slang や一時的なはやり言葉、若者言葉の場合にはとくにそうだ。しかし、これは「辞典」と名のつくものの宿命でもある。辞典が最新情報の先頭にたつて走れることなどあり得ないのだ。

それともう一つ辞典づくりに参加して感ずることは語彙の数とスペースとのたたかいである。辞典のページ数が限られていて収録語彙数を増やそうとすれ

ば当然一語につき使えるスペースは少なくなる。一語につき例文を入れたり、その語彙の由来や文化的背景などの説明を加えれば加えるほど全体の語彙の数は制限されてくる。これもまた「辞典」というものの宿命である。ページ数が無制限に使える辞典づくりなどあり得ない。辞典とは出版社や編集者の意図、読者のニーズの問題、作成期間、費用などさまざまな諸条件の中から生まれてくる産物なのであるから。

ずい分まえおきが長くなってしまったが、私は昨年、在外研究のため一年間イギリスで過ごした。かけ足でイギリス全体をあちこちと旅行して歩いたが、ほとんどをロンドンで過ごした。そのとき人に会ったり、雑誌や新聞を読んだり、街を歩いていたりしていたときに出くわした新しい言葉や意味のメモをとっておいた。すでに日本で発行されている英和辞典に収録されているものもあれば、そうでないものもある。辞典づくりのように極端にスペースに制限されることなく、メモにとった言葉の意味や文化的な背景などを説明することにより、イギリスの社会や文化の理解の一助としたい。

2. Finance

building society

ロンドンのみならず、イギリスのちょっとした小都市を歩いていると必ず目に入ってくるのが building society という看板である。この看板を見てそのまま「建築協会」と訳してしまった人がいたそうだが、building society は建築に関係があるものの建築協会の意ではない。

Building society というのは住宅を購入する人に長期返済の住宅ローンを貸す組合のことである。住宅ローンのことを mortgage というのだが、これは住宅購入者は買った家を担保に住宅ローンを借りるからである。だから住宅を購入するに当たってイギリスの人々にとって building society はなくてはならぬ存在であり、日本で言えばさしずめ住宅金融公庫や市中銀行と言ったところであろう。ただ日本の住宅金融公庫や市中銀行と違うところは building society の場合、組合員の拠出金によって運営されていることと、購入する住宅価格の

90%までローンを融資してくれることである。イギリスでは世帯の63%が持ち家だが、そのほとんどが building society のやっかいになっていると言っているだろう。

Building society の歴史は古く1775年に Birmingham にできた組合が最初である。イギリスでは日本と比べて持ち家をバックアップする制度がはるかに充実している。たとえば持ち家の場合、住宅ローンの金利分が所得控除される。土地の非有効利用を阻止する土地税制もある。イギリスの有名な諺に An Englishman's house is his castle. というのがある。これはもともと privacy を重んじるイギリス人の生活感覚の中から生みだされてきたものだが、それにしても日本の住宅のようなウサギ小屋 (rabbit hutch) ではお話になるまい。この諺の背後には privacy だけでなく住宅のスペースも関係しているように思われてならない。ある程度のスペースがないと privacy を守ることなど全く不可能なことなのであるから。いずれにしても building society を抜きにしてイギリスの住宅の歴史や住宅事情を語ることはできないのである。

Big Bang

1986年10月より行なわれたロンドン証券市場の自由化を目指した証券制度の大改革のことで、次の4つの骨子からなりたっている。(1) 最低委託手数料制の廃止 (2) 取引所会員に対する非会員の資本参加制限の撤廃 (3) ブローカー業務と取引所内仲買業務の兼業の承認 (4) 英国株と国債の売買システムの改革など。

こういった一連の大改革の結果、ロンドン証券市場はかなりのスピードで拡大し続けている。たとえば、今年1月から9月までの国内株式の対顧客売買高は1日平均11億5千7百万ポンドで、前年同期と比較すると80%もの大幅な増加になっている。また業者間売買が活発になったということもあり、国内株式市場は大改革以前と比較して3倍以上もの規模に達していると言われている。サッチャー首相による民営化企業の推進の結果、テレコムでは200万、ガスでは500万の国民大衆が株主となり、証券市場の活性化に重要な役割を果たして

いる。Big Bang とは大げさな表現に映るかも知れないが、英国の金融・証券制度の生き残りをかけた改革であり宇宙は大爆発によって誕生したという宇宙起源説にちなんでつけられたものである。

ちなみに、こういった一連の証券制度の大改革はアメリカに於いては1975年にすでに行なわれている。

loan war

イギリスの新聞を見ていると、しばしば loan war という言葉に出くわす。これは金利にまつわる銀行間、銀行と building society との間の顧客獲得競争のことである。とくに金利の設定の面で日本の銀行は大蔵省による規制でがんじがらめにされているが、イギリスやアメリカの場合、かなり自由だ。だから他行よりいち早く貸出し金利を下げて文字通り loan war を展開することになる。とくに近年、市中銀行と building society が熾烈な競争を展開している。だから building society も住宅資金の貸付けだけでなく、cheque book や credit card を発行したり、standing order（自動振替の依頼）を取り扱ったり、本来の銀行の業務にまで進出してきている。

新聞では時折、Loan war hots up on home front! (*Sun*, April 23, 1986) とか Cashing in on the loans war (*Daily Mirror*, May 11, 1986), Building society loans stay at record level (*The Times*, May 17, 1986) といったような見出しが散見されるが、こういった一連の loan war が消費者にとってありがたいことは言うまでもない。真の意味の競争原理を導入することなしに、一般消費者が恩恵をこうむることなどあり得ないのだ。日本の銀行も本格的な loan war を展開してくれれば、消費者にとってありがたいのだが、欧米諸国並の金融機関の自由化がいつ行なわれるのであろうか。

3. Media

breakfast TV

イギリスに滞在してまもなく耳にするのが breakfast TV あるいは Break-

fast Time という言葉である。breakfast TV というのは早朝のテレビ番組を表わす口語表現だが、breakfast TV という言い方は、もちろん、“出勤前に朝食をしながらテレビを見る” というところからきている。

Breakfast Time は BBC が1983年1月よりはじめた早朝のテレビ番組の名前である。内容はニュースが主であり、天気予報、スポーツ、有名人へのインタビューなど。放送開始は午前7時とイギリスにしてはかなり早い。だからこそあえて breakfast TV というわけだ。何しろ Channel 4 の放送開始時間は今だに午後2時15分であるから。

このほかに ‘Good Morning Britain’ という民間のテレビ局 ITV が始めた早朝の番組がある。放送開始は BBC より1カ月遅れ、1983年の2月から。放送内容はニュースを主体として BBC のそれとほとんど同じである。ただ全体と言えることはイギリスのテレビの場合、たとえ大事件を扱うニュースにしても客観的な事実だけを淡々とした態度で報道しているように思われる。少なくとも、なんらかの事故で娘や息子を失ったばかりの親にマイクをつきつけて「今、どんなお気持ちですか」などといったような質問をしたりはしない。

Brain of Britain

イギリス人なら誰もが知っているラジオのクイズ番組と言えば、Brain of Britain であろう。何しろこのクイズ番組は30年以上も続いているのだから。最初は ‘What Do You Know?’ というタイトルであったが、途中から Brain of Britain になり、略して Brian と呼ばれ、大衆の間で親しまれている。

このクイズ番組は BBC Radio 4 で週に一度放送され、参加者はスタジオ内の聴衆の前で general questions に答える仕組みになっている。毎週、勝ち抜いてきた者は ‘the title of Britain for the year’ を獲得する。筆者もラジオを聞きながらこのクイズ番組に何度か挑戦してみたが、とにかく質問がかなりの早口で行なわれていることと、質問の内容があまりにも広範囲で大いに閉口したものだ。

1974年以来、このクイズ番組の問題を作成してきた Ian Gillies が昨年、*Brain of Britain* というタイトルの本を出版した。日本のラジオやテレビのクイズ番組と比較すべく、その中から Quiz One だけを紹介しておこう。

Quiz One

1. The mainland of Australia is divided into the five States, the Australian Capital Territory, and what?
2. What is the name of the ruling house of Monaco?
3. Which cartoonist created the strips 'The Cloggies' and 'The Fosdyke Saga'?
4. In radio F.M. stands for frequency modulation. What does A. M. stand for?
5. What was the name given to the General Election held in 1900 during the Boer War?
6. How does a boxer qualify to keep a Lonsdale Belt permanently?
7. What does the abbreviation B.P. stand for after the name of a drug, like, say, aspirin B.P.?
8. What city has a Latin Quarter called Schwabing and a large park called the Englischer Garten?
9. In which of the rooms of Buckingham Palace are investitures held?
10. What trick was the magician Chung Ling Soo performing when he was fatally wounded on the stage of the Wood Green Empire in 1918?
11. Who in fiction owned a house named Thornfield Hall?
12. What is the full name of the N.A.A.C.P., the American civil rights pressure group?

Mastermind

イギリスのテレビを見ていると、日本のテレビと同じようにクイズ番組が花

盛りだが、日本のクイズ番組よりはるかに知的でかつ高級なような気がする。いろいろあるテレビのクイズ番組の中で最も高級でしかも popularなのはこの Mastermind だ。BBC 1 が毎週 1 回放送している。

クイズ番組の参加者は自分で分野を選択できる specialized questions と選択のできない general questions の両方に答えなくてはならない。Brain of Britain と同じように毎週勝ち進んでいった者が最後に 'the title of Mastermind for the year' を手にする。このクイズ番組はかなり高度でむずかしい。質問されたらすぐに答えなくてはならない。思い出したり、考えたりする時間がほとんどない。Mastermind とはよく言ったものである。だからこのクイズ番組の問題を想定した本も何冊か出版されているぐらいだ。

ちなみに昨年の優勝者は大学に勤務する 29 才になる Jenniefer Keareney 女史であった。昨年このクイズ番組への申込者は全部で 4,000 人。その中 64 人が選ばれ、毎週勝ち抜き、彼女は見事、栄冠を勝ち得たわけだ。日本の娯楽番組の低俗化はとどまるところを知らないが、Mastermind はイギリスのテレビの娯楽番組の中でもきわめて健全であると言わざるを得ない。少なくとも知的な遊びがある。彼女が選択した specialized questions は the life and works of Elizabeth Gaskell であった。

彼女が優勝した翌日、*Daily Telegraph* (June 20, 1986) は写真入りで、彼女のことを紹介したほどである。時折、この番組を見ながら、テレビはそれぞれの国の国民性を表わすものであることをしみじみと考えざるを得なかった。

4. Education

Floodlight

Floodlight とは Inner London の教育庁が毎年発行している成人学校のガイド・ブックに付けられた名前である。1987年版のガイド・ブックは 352 ページもある堂々としたものである。このガイド・ブックを手がかりにイギリスの成人教育について考えてみたい。

イギリスの成人教育の歴史の古いこと、国民一般の間に深く根ざしているこ

とはよく聞いていたが、昨年、実際に成人学校に出席してみて、その充実ぶりにはただただ感動するばかりであった。とにかく学問的なものから趣味、実用的なものにいたるまであらゆるコースがそろっている。たとえば、骨董鑑定、占星術、考古学、犯罪学、薬学、環境学、自動車整備、盆栽、スクオッシュなど。外国語にいたっては50カ国語以上あり、Basque, Bengali, Catalan (カタロニア語), Gujarati (グジャラート語), Kurdish (クルド語)などのコースもある。このところ、日本語のコースはかなり人気が出てきており、筆者が出席していた成人学校では登録開始と同時にすぐに満杯になった。

夜の授業はすべて小学校と中学校の校舎を使って行なわれる。考えてみると、生徒が帰った後の校舎を使わない手はない。日本の民間がやっているカルチャー・センターや文化教室なども小学校や中学校の校舎を借りてやれば、もう少し授業料が下がるに違いない。

授業料が極端に安いこともイギリスの成人学校の大きな特徴である。次の項目に該当する場合、年間の授業料が僅か3ポンド(約750円)でよい。(1) 60歳以上であること (2) 年金生活者 (3) 失業者 (4) 外国語としての英語学習者 (5) 18歳以下の者等。しかも18歳以下で身体障害者の場合には無料である。

イギリスの成人教育は全国的な規模で行なわれており、イギリス全土で約6,500もの成人教育センターがある。国家によるかなりの財政的な援助を受けていることは言うまでもない。筆者にとってとくに印象深く思ったのは、イギリスの成人教育は高齢者に対して立派な生きがいの機会を与えていることである。日本でも人口の高齢化が急速に進んでおり、現在10人に1人という65歳以上の高齢者が、2020年には4人に1人に達するという。年金の充実、雇用の面からと高齢者対策を急がなくてはならないことはもちろんだが、生涯教育としての成人教育を充実させていくことも大事である。その場合、イギリスの成人教育が大いに参考になる筈である。

5. Charities

Oxfam/OXFAM

イギリスには慈善事業を行なっている市民団体が数多くあるが、その中で歴史も古く、最も活発に慈善事業を行なっているのが、この Oxfam である。Oxfam というのは The Oxford Committee for Famine Relief (飢饉援助オックスフォード委員会) の略称であり、開発途上国の人々を援助することを目的として1942年にオックスフォードに住む人々によって結成された市民団体である。現在も本部はオックスフォードにあり、イギリス全土にわたって支店が500軒以上もある。筆者はこの夏、人口僅か1,000人足らずの Wales の小さな古本屋の町 Hay-on-Wye を訪ねたがそこにも Oxfam があり深く感動したことを覚えている。

この市民団体は年々拡大の一途をたどり、一大民間援助団体に成長し、昨年は100億円以上の援助資金を集めた。援助資金の中の80%が海外援助にあてられている。現在では25,000人もの volunteers が働いている。

Oxfam では中古品を安く売っているだけでなく開発途上国でつくられた製品をも売っている。今年の春、イギリスでの在外研究を終え、引越し荷物を前にうろたえていると、不用品があったら Oxfam に持っていくようにと家主はアドバイスしてくれた。

Oxfam の存在意識は何も開発途上国への援助だけにあるのではない。中古品を有効に利用し、使い捨て文化をかたくなに拒否するしたたかな生活態度にこそイギリス人の国民気質がよく表われているのである。一昔前、日本で流行した「消費者は神様である」などという言葉はイギリス人にとっては無縁なのである。それに日本人には中古品を売ったり、買ったりすることにある種の羞恥心を覚えるというきらいがある。試みに団地や新興住宅地のごみ捨て場をのぞいて見るがよい。まだ完全に使用可能なものがところせましとばかりに捨てられているのだ。Oxfam の活動が盛んなのも質素な生活を何よりも重んじるという堅実なイギリス人の生活態度を抜きにしては考えられないのである。

最後に Oxfam の活動が開発途上国への物質的な援助だけでなく、世界の難民問題に対しても積極的に発言していることも付け加えておかななくてはならない。一つだけ例を挙げておこう。Oxfam gave a warning yesterday of an

imminent outbreak of disease among Ethiopian refugees in Somalia as growing numbers flee across the border. It forecasts a “major human disaster” within weeks. (*The Times*, April 19, 1986).

NSPCC

National Society for the Prevention of Cruelty to Children (全国児童虐待防止協会) の略称。児童に対する虐待防止を目的として1884年に設立された民間の団体。

ヴィクトリア時代の長時間にわたる重労働と悪質な雇主の法を無視した児童に対する虐待は今、思いおこしただけでも身の毛がよだつ思いであるが、児童虐待の質は変わったとはいうものの、今尚、児童虐待が頻繁に行なわれているのがイギリス社会の現実だ。とくに離婚や別居による家庭崩壊に伴う stepfather や stepmother による児童虐待の例が多い。昨年一年間だけでもイギリスの新聞に目を通していて、何度 child abuse という言葉を目にしたことか。

NSPCC は募金集めのために新聞や雑誌に定期的に広告を掲載しているが、NSPCC の活動内容を知るべく、広告文の一部を紹介しておこう。With a stepfather who refused to acknowledge her existence and a mother too frightened to help her, this child was being slowly and deliberately starved. She'd reached the point where she was feeding herself out of dustbins. It didn't happen in the famine stricken third world, it happened in an English town. The NSPCC doesn't set out to punish the parents or break up the home. The child has to be protected. We provide help for both her and her parents. (*The Times*, May 14, 1986)

この広告文と一緒にあばら骨をはっきりと数えることができるほどガラガラにやせこけた女の子の写真が掲載されている。思わず顔を背けたくなるような写真だ。児童虐待防止協会が設立されてから 100 年以上もたっているにもかかわらず、児童虐待は年々増加の傾向にある。児童虐待の問題はイギリス社会の恥部といってもよい。現在 5 万人以上の voluntary workers が NSPCC のた

めに活動している。

6. Medicine

hospice

ほとんどの英和辞典は hospice の定義として「巡礼者、参拝者用の宿泊所」あるいは「宗教団体などが経営する病人、困窮者用の収容施設」としてあるが、これは元来はそうであったのであり、これでは現在の hospice の意味は伝わらない。

hospice というのは、イギリス人の医師、シシリー・ソンドースが1967年にロンドンに設立した「聖クリストファー・ホスピス」が始まりであり、死期の遠くない患者を入院させ、病苦をやわらげ、慰安の工夫をこらした hospital あるいは home のことである。

現在、アメリカやイギリス、カナダには、ホスピスが約2,000床もあると言われているが、日本ではまだ大阪市の淀川キリスト教病院、浜松市の聖隷ホスピスなど数カ所にすぎない。国立病院としての初めてのホスピスが千葉県に開設されたのも今年の10月だ。

イギリスのホスピスは患者に対する配慮のきめ細かさという点では定評がある。どこのホスピスも患者が玄関に到着すると、婦長や看護婦が温かく出迎えてくれるという。そして terminal care (末期医療) のモットーは「最小限の薬剤で、一番シンプルな治療」であるという。医師と看護婦が一体となり、さらによりよい治療法を求めて検討を重ねる。患者の症状についても患者がどの程度まで知りたいかを確かめていつも正直に答えるという。薬づけ、検査づけと言われる日本の医療とは大違いである。日本の場合には薬を使えば使うほど、検査をすればするほど医者が儲かるようになっている。だから国民医療費が膨張の一途をたどり国民生活を圧迫しているわけだ。いや皮肉な言い方をすれば、薬づけ、検査づけにされればいい方で、急患の場合、たらい回しにされ命を落とすことにもなりかねない。

日本の超高齢化社会は目前に迫っている。イギリスのホスピスは日本の末期

医療を考える上で、治療法や看護体制だけでなく多くのことを教えてくれそうである。

7. Transport

Spaghetti Junction

信号機のない交差点 roundabouts はイギリスではあまりにも有名だ。なにしろ日本のように道路が空いているにもかかわらず、交差点の赤信号のために長々と待たされることは一切ないのだから。この roundabouts は馴れない日本人には最初ちょっとまごつくが、右側から来る車を常に優先させるということだけを頭に入れておけば、実に合理的、科学的(?)な交差点であることがわかってくる。

この roundabouts と intersection が幾重にも折り重なっている個所が Birmingham 北部の高速道路M 6上にある。通例、Gravelly Hill Interchange と呼ばれるのだが、俗称 Spaghetti Junction。空から見ると、幾重にも折り重なるくねくねとした道路がいかにスパゲッティのそれに似ているのだ。Spaghetti Junction とはいかにイギリス人らしいユーモア感覚のあふれた俗称である。

sleeping policeman

どこの国にも人の迷惑を考えないスピード狂はいるものだ。イギリスもその例外ではあり得ない。それを防ぐために考案されたのが、この sleeping policeman (スピード防止帯)である。とくに典型的な住宅地区や大学のキャンパスなどドライバーが自動車の速度を上げられないように道路上にデコボコの隆起が設けられている。近年、日本でも混雑する駅前道路などにこの種のスピード防止帯が設けられてきている。たとえ警官が見ていなくても、この防止帯にさしかかると、道路がデコボコになっているので、自動的に自動車のスピードを落とさざるを得ず、だから sleeping policeman ということか。

sleeping policeman とは Spaghetti Junction 同様ユーモラスな命名であ

る。

Railcard

英国鉄道が発行している割引用のパスのことである。24歳以下の者、身体障害者、60歳以上の者用と種類はいろいろあるのだが、ここでは Senior Citizen Railcard (60歳以上の人のための割引パス) だけをとりあげたい。

60歳以上の人が12ポンドを支払って Senior Citizen Railcard を購入すると、次の特典がある。50マイル以上旅行する場合、有効期間1カ月間で往復切符の値段の3分の1が割引きされる。50マイルまでの日帰り往復切符は2分の1の割引きになる。

私はロンドンのターミナル駅で何んの気なしに Senior Citizen Railcard 用のパンフレットを手にしたのだが、とくに高齢者に対する英国鉄道の徹底したサービスぶりには深く感動したものである。と同時にいやでも日本の旧国鉄のフルムーンと比較せざるを得なかった。

周知のようにフルムーンとは旧国鉄のキャンペーンの一つで、二人の歳を合わせて88歳以上の熟年夫婦対象の割引旧婚旅行のことである。1981年に開始されたフルムーンは大ヒットし、初年度の売上げが33億円、翌年度には52億円にもなったと言われている。このフルムーンが発売されてから間もなく、新聞の投書欄で不満の声のべられた。それはフルムーンは戦争や事故などで後に一人残された妻や夫の立場を全く考慮に入れていないということである。その通りである。考えようによってはフルムーンは弱者切り捨てのサービスだ。有効期間も Railcard と比べると余りにも短かすぎる。割引きにはなっても有効期間が短かすぎてのんびりとした旅行をしていられないのだ。

日本とイギリスの鉄道の切符を例にとってみても、日常生活のゆとりやレジャーに対する感覚がまるで違うし、老大国だ英国病だと言われながらも、イギリスの福祉政策の懐の深さみたいなものを感じざるを得ないのである。逆に日本は国は豊かになったが、日常生活のゆとりという点ではまだまだである。

8. Sport

fun run

慈善事業のための募金集めのために行なわれるマラソンのこと。その代表的な例が1978年以来、*Sunday Times* がスポンサーになって行なわれている London Marathon (London fun run とも言われる) である。このほかにも Live Aid, Sponsored Walk, Sponsored Jog, Sponsored Swim, などイギリスではスポーツと慈善事業をミックスした行事が多い。

たとえ何時間かかろうとも、London Marathon の完走者は全員 *Times* に名前が記載される。昨年の London Marathon の参加者は2万人を越えた。スポーツ、慈善事業としての fun run がイギリス人の国民生活の中に深く浸透している証拠である。

9. むすび

昨年、一年間、在外研究のためイギリスに滞在して、イギリスの社会や文化と日本のそれとあれこれ比較してみる機会を得た。日常の雑事にわずらわされることなく、日英の文化や国民性の違いについて改めて考えて見る機会を得た。新聞や雑誌などもかなり余裕をもって読むことができた。経済的に保証され、時間的な余裕があると見えないものまで見えてくるから不思議である。

イギリスで気がついたり、感じたりしたことは多くの点でいやでも日本と比較せざるを得なかった。もう何年前になるであろうか「老大国」、「英国病」なる言葉が日本のジャーナリズム界で氾濫したのは。

今回、イギリスで生活してみて先ず感じたことは、日本のジャーナリズムの世界から受けるイギリスに関する印象と実際に生活してみた実感との大きなギャップだった。筆者自身、一介の在外研究者であったために、なおそう感じたのかも知れないのだが、イギリス人のゆとりある日常生活のリズムが日本人のそれとはまるで違うのである。生活感覚の奥行きの高さとも言えるだろうか。

語彙を枕にして、日本と比較しながらイギリスの文化や社会について考えてみたのが、この小論である。組織だてて述べたわけではない。しかし、全体を通して読んでみると日本のことを批判しすぎたきらいがないわけでもない。だが、これは私にとっては新鮮なる強いカルチャー・ショックだったのである。あえて無知をさらけ出すのを覚悟してショックを率直に語らざるを得なかった。

今回、使用したメモはほんの一部なので、また語彙を枕にして、イギリスの社会や文化について考察してゆきたい。

(November 15, 1987)

References

1. Room, Adrian, 1986. *Dictionary of Britain*. Oxford University Press.
2. Bromhead, Peter, 1986. *Life in Modern Britain*. Longman.
3. Mort, Simon, ed. 1986. *Guardian New Words*. Longman.
4. Trevelyan, G.M. 1952. *Illustrated English Social History*. Longman
5. Osman, Tony. 1985. *The Facts of Everyday Life*. Faber and Faber Limited.
6. Gillies, Ian. *Brain of Britain*. 1986. Robson Books Ltd.
7. Inner London Education Authority. *Floodlight*. 1987.